

談話資料からみる高知県幡多方言の多様性

—話者の社会的属性の観点から—

高木 千恵 (大阪大学)

1. はじめに

本研究は、2000年代初頭に高知県西部の幡多方言域で収録された談話資料を用いて、同一方言を母方言とする話者間・話者内の言語的バリエーションと話者の社会的属性との関係を探るものである。本発表では、高年層話者を対象に、談話に現れるバリエーションと話し手の「性別」の関係に焦点を絞る。方言体系の中にある語彙的変異や文法的変異に話し手の性と結びついて使われるものがあるか、実際の会話データから帰納的に考えたい。

2. 方言を対象にした「性差」研究

日本語標準語の「性差」を扱う研究に比べて、日本語方言を対象に「性差」の問題を扱った研究はこのほか少ない。高木(2020)では、国立国語研究所の「日本語研究・教育文献データベース」に収められている1950年から2019年4月までの間に発表された文献を調査し、「性差」に関わる検索語が含まれている文献1771件のうち、方言や地域差を扱ったものはわずかに125件に留まると指摘した。「ことばとジェンダー」を扱う論文や書籍が年を追うごとに増加していくのに対して、方言における「性差」の研究にはそうした動向もみられない。山口(1991)は日本語の方言について、「男女差にかかわる言語形式が体系的に整っている方言」と「男女差にかかわる形式がほとんどないという方言」の二つのプロトタイプがあることを指摘しているが、こうした観点からの研究は、推し進められなかったようである。

その一方で、方言を対象とする社会言語学的な研究において、「性差」は世代差とともに主要な分析の観点とされてきた。臨地調査や通信調査で得られたデータから、方言内部のバリエーションや方言形と標準語形の使い分けに性差があるとする指摘はたびたび行われている。ただし、調査データの多くが協力者の内省報告によっていることから、実際の方言使用に性差があるかどうかについては明らかでない点が多い。

高木(2020)は、方言と「性差」を扱うこれからの研究の課題として次の4点を挙げている。

- (a) 方言における観念上の〈女ことば／男ことば〉の整理
- (b) 上記(a)と実際の【女性のことば／男性のことば】の対照
- (c) 実際の【女性のことば】と【男性のことば】の対照
- (d) 【女性のことば／男性のことば】の多様性の記述

本研究の関心は上記の(d)にある。同じ共同体のメンバーで同一方言を母方言とする話者たちのことばには、どのような共通点と相違点があるのか。とくに相違点について、それは「男性」「女性」といった大きなグループに収斂されるものであるのか、あるいは、性別とは別の要因に基づくものであるのか。会話に現れるバリエーションを手がかりに幡多方言の多様性を整理し、その多様性をもたらす要因について考える。

3. データ概要

本研究で扱うのは、高知県西部の宿毛市と三原村で収録された自由会話資料である。吉田(1962)は、高知県の方言を東部・中部の土佐方言(高知方言)と西部の幡多方言に大別しているが、宿毛市と三原村は後者の幡多方言域に位置する。松丸(2017)は幡多方言の特徴として、東京式アクセントであること、土佐方言にみられる原因・理由の接続助詞「～キ」やアスペクト形式の「～シユ」「～シチュ」といった形式を用いず、「～ケン」「～シヨル／シヨ」「～シチョル／シチョ」を用いること、やさしい命令表現として「書いたや」「見たや」など「過去形+ヤ」とみえる形式をもつことなどを挙げている。

表 1 談話情報・話者情報

談話 ID	収録時間	話者間の関係	話者 ID	仮名	生年	収録時年齢	性別	市外の居住歴(数字は当時年齢)
HS1-M	約 45 分	近所の親しい人	STTM	塚田隆史	1926	75	男性	17: 東京都, 18-20: 神奈川県相模原市
			SASM	下村篤郎	1930	72	男性	19-20: 大阪市
HS2-F	"	"	STSF	塚田鈴江	1930	72	女性	なし
			SASF	下村聡子	1938	64	女性	なし

音声収録は、2000 年および 2002 年に、研究資料として活用することの承諾を得たうえで松丸真大氏(現・滋賀大学)によって行われた。発表者はこの資料を同氏から譲り受けてデジタル化し、文字化と分析を進めている。収録された音声は、同性の 2 人 1 組による会話のほか、3 名から 4 名の話者による雑談、調査者(松丸氏)が同席している会話などから成る。本発表ではこのうち、2002 年に宿毛市で収録された同性どうしによる会話データを扱う。話者・談話情報を表 1 に示す。二つの談話はそれぞれ、日常的に付き合いのある親しい人どうしの自由会話である。話者間に年齢差があるが、会話の中で話し相手に対して敬語が使われることはなかった。なお、HS1-M の会話の参加者はそれぞれ HS2-F の話者の配偶者で、夫どうし・妻どうしの組み合わせになっている。

4. 分析項目

本発表では人称詞(自称詞・対称詞)のバリエーションと間投詞・間投助詞・終助詞として使われるナ系とヨ系の助詞を取り上げる。談話に現れた各項目のバリエーションは次のとおりである。

- (1) 自称詞：ワタシ、ワシ、オラ (3) ナ系助詞：ネー、ノー、ナー
 (2) 対称詞：オマエ、アンタ、ワレ (4) ヨ系助詞：ヨ、ゼ(デ)

このうち(1)～(3)は、高知県幡多方言話者のスタイル切り換えを扱った高木(2002)の分析項目と重なる。結果の解釈において、適宜高木(2002)を参照する。(4)のゼは、佐竹(2020)で「よ」相当の表現とされることからヨ系助詞に含めた。談話にはデの形もみられたが、ここではゼの音声的変異として扱う。(3)(4)に関しては、それぞれが意味的に同一とはいえない可能性もあるが、まずは出現傾向を確認してみたい。

5. 談話に現れる自称詞・対称詞のバリエーション

2 つの談話における自称詞・対称詞の出現頻度を表 2・表 3 にまとめた。表中、用例が得られなかったセルには数字の 0 に代えて「-」記号を用いた。まずは 4 人の話者の用いる自称詞についてみていきたい(表 2)。談話には、ワタシ、ワシ、オラの 3 つの形式が現れた。このうちワシは全員の使用形式である。またワシの使用は鈴江と聡子だけにみられ、隆史と篤郎にはみられなかった。いくつか例を挙げる。

- (5) 691 篤郎：ゆみちゃんも あこへ あい、広いけん、[土地を] 譲っちもらうように、(隆史：うん.)
わしん、相談しちくり 言うけん わしん 相談しようがじゃん

- (6) 89 聡子：まあー、さあ タケノコ ほっちこうか ゆち ほっちきたら わしん (鈴江：うん.)
 さっと 湯、湯ー かけち、ゆがく。

- (7) 613 鈴江：東京 行たらねえ、東京 行たら こたうで わたしらも。

篤郎はワシのほかにもオラも使用しているが、すべて発話の引用で、自身を指している例はなかった。

- (8) 317 篤郎：[話題の人物が自分の父親に腹を立てて言ったことばの引用]

「ばかすけが あれを 置いちょいたら、おらー ざまな 財産ー なるがやった」言うち。

高木(2002)によれば、ワシはオラよりもあらたまり度が高く、目上と話す際に使用できる形式である。一方のオラは同輩や目下に使う形式で、目上には使えないという。隆史は篤郎よりも年上であるので、篤郎との会話においてオラを使用することも可能である。しかし、実際にはワシだけが使用されている。つまり、ワシ・オラの使い分けは関係性標示のための絶対的なものではないということになる。オラが使用されないのは、隆史のことばの志向性と関係がありそうである(後述)。

表2 談話に現れた自称詞

	ワタシ	ワシ	オラ	合計
隆史	-	5	-	5
篤郎	-	13	9	22
鈴江	16	11	-	27
聡子	7	8	-	15
合計	23	37	9	69

表3 談話に現れた対称詞

	オマエ	アンタ	ワレ	合計
隆史	-	-	-	-
篤郎	8	-	5	13
鈴江	2	5	-	7
聡子	1	2	-	3
合計	11	7	5	23

次に、鈴江と聡子におけるワタシとワシの関係について、当該方言の話者は、ワシをワタシの約まった形と捉えており、元の形であるワタシの方がより丁寧と認識しているという(高木 2002)。親しい間柄のフランクな会話でワタシが使われるのは、2人の丁寧志向の表れかもしれない。

次に対称詞について、隆史には対称詞の使用自体が見られず、運用は不明である。他の3名にはオマエの使用がある。ただし聡子によるオマエの例は、寺の住職から聡子への発話の引用や仮定の話における不特定の人物に向けてのものであり、直接の話し相手である鈴江にはアンタのみを使用している。また、鈴江の使用する2例のオマエはどちらも聡子を指しているが、アンタの5例には、聡子のほか、夫の隆史や調査者、および近所の人から鈴江への発話の引用などが含まれており、オマエより適用範囲が広い。

(9) 57 篤郎：おまえや 戦争は 外地は 行からつとの一。(篤郎→隆史)

(10) 68 鈴江：あれぜ。おまえがねえ、なんでもさっとできるけんね。ほんでぜ？(鈴江→聡子)

(11) 191 聡子：うん。まあ、自分らみたいに これ、近所へ よっち あんたらとねえ。(聡子→鈴江)

発表者の観察では、幡多方言のオマエは基本的に目上から目下に対して使われるが、待遇価は低くなく、卑語的ではない。上位者から下位者への親しさ標示のような使い方をするようである。そのことをふまえると、年上の鈴江が聡子に対してオマエを使用したり、寺の住職から聡子への発話としてオマエが使われたりすることは、このルールに則っているといえる。一方、篤郎が年上の隆史にオマエを使用することは、規範から逸脱しているように見受けられる。しかし、8例中7例が隆史を指して使われていたことから、篤郎から隆史へのオマエ呼びは日常的に行われていると想像される(残る1例は隆史の妻の鈴江に対しての使用)。今後、他の話者の対称詞使用と照らし合わせたうえで解釈する必要があるだろう。

なお篤郎の使用するワレは、自称詞オラと同じく発話の引用にのみ現れている。

(12) 463 篤郎：「わりゃー あれか。この、犬の 喧嘩しよるが こりゃ 両方 わりーがじゃん」(隆史：{笑}) 「われ犬も おるけん、け、喧嘩しよるがじゃけん。おらん 犬も そりゃ 吠えかかっちゃうが わりいかもしれんけんど、」(隆史：んー。) 「われ犬も 吠えようがじゃけん、両方 わりーがじゃ けんど わりゃ、おら犬ばかり 叩きよるが、」(引用：話題の人物→喧嘩相手)

ちなみに、同じ人物の発話の引用が隆史にもみられるが、隆史は、オラではなくワシを使用している。

6. ナ系助詞・ヨ系助詞

続いて、間投詞・間投助詞・終助詞として使われるナ系助詞・ヨ系助詞についてみていきたい(表4・表5)。まずナ系助詞について、ネーの使用が全員にみられたのに対して、ノーとナーの使用は男性話者にしかみられなかった。また、使用数に関して、ネーをもっともよく使用しているのは鈴江(311例、例(7)も参照)で、その次が聡子(159例)である。ノーは篤郎による使用が多く(例(9)も参照)、隆史は、ノーよりもネーをよく用いている。次例にみるように、ノーとネーが混在するケースもある。

表4 談話に現れたナ系助詞

	ネー	ノー	ナー	合計
隆史	47	20	2	69
篤郎	11	104	6	121
鈴江	311	-	-	311
聡子	158	-	-	159
合計	527	124	8	660

表5 談話に現れたヨ系助詞

	ヨ	ゼ(デ)	合計
隆史	20	1	21
篤郎	15	11	26
鈴江	47	25	72
聡子	31	22	54
合計	113	59	173

(13) 776 隆史：思うちみたらねえ，(篤郎：うん) あのー，嫁さんーをよ，(篤郎：んー。) もらうに，財産があるところがいか，いやが，つような，(篤郎：あー。) 話が 出だしたががねえ，(篤郎：んー。) もう 30 年になるのー。(篤郎：あ，そんな 話ん 出だしてからのー。) ねえ。

高木(2002)が対象とした高年層男性話者の場合、ノーは同世代の親しい友人場面に限られ、孫や調査者(よそ者)との会話場面ではネーしか使われていなかった。ネーの方がノーよりもやわらかいと認識されているため、孫場面や調査者場面でノーが控えられたと解釈している。逆にいえば、隆史が、親しい友人との会話場面においてもネーを多用するのは、丁寧なことばを志向しているからと解釈できそうである。

同様に、鈴江と聡子の場合、非常に多くのネーが出現しているにもかかわらずノーは一切使われない。このことから、2人にとってのノーは使用語形ではないということが窺える。

ナ系助詞として収集したナは全体で8例と非常に少なかった。一つだけ例を挙げておく。

(14) 551 篤郎：人は、ええ人やったんな。

最後にヨ系助詞についてである。まず、どの話者もヨとゼ(デ)の両方を使用している(表5)。次に、得られた用例をみると、ヨはほとんどすべての例が体言相当の語句に接続しており、動詞や形容詞述語の平叙文に接続する例は1例もなかった。ヨとゼは、意味的には類似性があるかもしれないが、接続制限の有無という点では、ネーとノーのような交替可能な関係にはないということになる。

7. 談話に現れる幡多方言の形式

ここまでの分析をまとめると表6のようになる。表では、全員に使用がみられた形式を真ん中に配置し、女性に偏る形式を表の左側に、男性に偏る形式を右側に配置している。こうしてみると、4名の話者は、ワシ・ネー・ヨー・ゼ(デ)という語形を共有しながらも、各形式とバリエーション関係にある他の語形を使用するか否かにおいて少しずつ違いを見せていることがわかる。

今回の分析項目においては、鈴江と聡子の言語使用はおおむね一致している。親しい人との会話におけるワタシ・アンタの使用がほかの女性話者にもみられるかについて、今後分析を進める予定である。一方、隆史と篤郎の言語使用には、共通点もあるが相違点もある。こうした点について、他の社会的属性からの解釈も考えてみたい。たとえば、隆史は農業の傍ら議員活動の経験があり、一方の篤郎は長く大工をやっている。そうした職業的な違いとバリエーション選択についても考える必要がある。個人ごとの分析を積み上げつつ、引き続き方言と「性差」の関係を探っていききたい。

表6 談話に現れた幡多方言形式

	ワタシ	アンタ	オマエ	ワシ	ヨ	ゼ(デ)	ネー	ノー	ナー	オラ	ワレ
鈴江	●	●	●	●	●	●	●				
聡子	●	●	●	●	●	●	●				
篤郎			●	●	●	●	●	●	●	●	●
隆史				●	●	●	●	●	●		

凡例 ●：談話において使用が確認されたもの。

謝辞 談話収録にご協力下さった皆様、話者をご紹介下さった皆様、並びに資料の利用をお認め下さった松丸真大氏(滋賀大学)に記して感謝申し上げます。本研究は JSPS 科研費 JP20H00015, JP23H00635 の助成を受けたものです。

参考文献

- 松丸真大 (2017). 高知県宿毛市方言 方言文法研究会(編) 全国方言文法辞典資料集(3) 活用体系(2) 科研費報告書 pp. 127-142. <https://hougen.sakura.ne.jp/shuppan/2017.html> (2024. 1. 8. 閲覧)
- 佐竹一男 (2020). 高知県幡多郡小筑紫村の方言と習俗 高知新聞総合印刷
- 高木千恵 (2002). 高知県幡多方言話者のスタイル切換え 阪大社会言語学研究ノート, 4, 55-72.
- 高木千恵 (2020). 日本語諸方言を対象にした「性差」研究の展望 待兼山論叢, 54, 1-17.
- 山口幸洋 (1991). 方言における男女差—東日本方言 国文学解釈と鑑賞, 56(7), 71-77.
- 吉田則夫 (1962). 高知県の方 講座方言学 8 中国・四国地方の方言 国書刊行会 pp. 427-449.